

私の人生の風景

小林 謙二



はじめに！

まずこの本を書き下ろそうと思ったきっかけからお話します。

私も今年で六十五歳になり高齢者の仲間入りをしたのですが、歳を取るとなにかと若いころの記憶が薄れてくるものです。今ならばまだ過去の出来事やさまざまな経験がかなり鮮明に思い出され、文章に残すことができる。そんな考えから筆を取った次第です。

自分の過去を振り返るとまずある思いがこみ上げてきます。それは「今、自分が存在しているのは両親のおかげ」ということ。厳しかった父、優しくった母。本当に感謝しています。また幼少からの思い出、ガキの頃のヤンチャな自分、学生時代のエピソード、友人のことなどが次々と思い出されてきました。

そしてふと「切り札」という考えが頭に浮かんできました。私は人生には三枚の切り札があると思います。それは「就職」「結婚」「転職」ですが、ここでどんな札を使うかによって大きく人生が変わってきます。そして私の一枚目の「就職」は自分ではなく、工業高校時代の恩師（故安井先生）によって切られたのです。私は自分の希望とは関係なく恩師が決めた日立関連会社に就職しました。しかしながらこれが非常に幸運なことだった。ここでの経験が後々の人生を決め、また多くの先輩、同僚、上司に出会うことができました。

それは二枚目の「結婚」という切り札にも関係しています。相手は同僚の女性で社内結婚。私は二十三歳で少し早い気がしましたが、こればかりはご縁ということもあり独身時代に別れを告げることといたしました。

日立時代は技術者としてさまざまな経験をしました。電子計算機（当時はコンピュータと言わず電子計算機と言っていました）と出会い、そこで培った技術がその後の私の人生の礎となったのです。このときはまさか今日までこの業界を長きにわたって続けるとは思っていませんでした。

転職は会社に勤めて五年目にやってきました。自分の未来像が自然とわかってきたのです。人に使われている以上自分が好きなことはできない。将来にも限界がある。そこで自ら独立を決意し、有限会社システムシンクを立ち上げました。この「創業」が三枚目の切り札でした。経営者兼システムエンジニアとして二東のわらじからスタートし、ゆっくりと会社を大きくしていき、いまでは経営に専念することができるようになりました。すべては優秀な社員、大事なお客さま、先輩、同業他社の経営者のみなさまのおかげだと思っています。

私がいつも大事にしている座右の銘は「一期一会」です。人生日々、いろいろな出会いがあり、友人、先輩、その他テニス仲間等々の人々とお付き合いをさせて頂いているわけですが、その存在がずっと私を支えてくれました。そして「つねに前進（悪いことがあっても前向きに）」。私は高校時代にラグビーをしていましたが、その基本的なルールは前進あるのみです。もうひとつは「継続（継続は力なり）」です。今の会社ももうすぐ創業四十周年を迎えます。四十歳に始め

たテニスも二十六年目、毎月一回欠かさない浅草寺巡りも二十五年目…等々です。

そうした言葉を再度心に刻み直し、これからも自分の信念を貫き通して人生を歩んでいきたいと思っています。

今の自分があるのは人のおかげ——いままでお世話になった人々に感謝をこめてこの本を出版いたします。

平成二十六年四月

吉日

小林謙二



著者近影。浅草寺の境内にて

1. 棚田とともに育った子供時代	3
2. 人生の進路が決まった高校時代	4
3. 生涯の礎を築いた日立時代	5
4. 転職、そして独立	6
5. 兄との思い出	7
6. 海外で得たもの、学んだこと	8
7. 経営者として自分を鍛えた時期	9
8. 欲というものについて	10
9. バブル崩壊の煽りを受けて	11
10. 私を救ってくれたもの	12
11. 子供達について	13
12. いかにして人を大事にしていくべきか	14
13. バングラデシュで感じたこと	15
14. 「転がる石に苔はつかない」の気持ちで	16

特別寄稿／

小林謙二様へ（日吉テニススクール・増子義明）	17
小林謙二社長との出会い（弁護士・栃木敏明）	18
人生において得難い友（株式会社ズイットワン代表取締役社長・水谷時雄）	19
前向きでアグレッシブで、そして温かく（篝能晴）	20
兄と過ごした日々（植田悦子）	21
取材を終えて（穂積直樹・元ビジネス雑誌編集長・現フリーライター）	

棚田とともに育った子供時代

私は一九四八年（昭和二十三年）十月六日に岡山県津高町・高野村に生まれました。高野村は標高五百メートルの金山の中腹に位置する、わずか二、三十世帯の小さい集落で、村民はみな農業で生計を立てていました。山の斜面には棚田が広がり、その四季折々の風景はとても美しくのどかなものでした。

棚田は多くの生き物を育み、春にはおたまじゃくし、夏にはセミやホタル、そして秋にはとんぼ、と幼い頃はさまざまな風物詩と戯れました。村を囲む森からは野鳥のさえずりや動物の鳴き声が聞こえ、私はその中でかくれんぼをしたり、木登りをしたりと遊び場所には事欠かない毎日でした。

幼少期はよく農作業を手伝わされましたが、それは「平地での農業」のようなイメージではなくとてもきついものでした。私の家は父母と私、そして二歳上の兄と三歳下の妹という家族構成でした。繁忙期には一家総出で棚田に出かけ、子供達は泥や土で真っ黒になりながら田植えや稲刈りを手伝いました。

貧乏——私の幼少期はその一言に尽きます。学校の勉強はいいから家の仕事をしろ、とそんな感じでした。農作業以外にも燃料の薪拾いから薪割まで何でも手伝わされました。

家は明治時代に作られた立派なもので、まず母屋、長屋、その隣に蔵がありました。本来蔵はお米を貯蔵しておく場所だったのですが、それ以外にも宴会で使うお皿や漆器、陶器、機織り機などお宝が沢山あった。また時にそこは悪さをした私を閉じ込める場所に早変わりしていました。

父、小林武夫は軍人上がりで子供の躰にはとくにうるさかった。言葉遣い、食事作法など事細かに注意された思い出があります。一方母、美代子は父と対称的に非常にやさしい人で、小言はほとんど言わず、私達をのびのびと育ててくれました。

よく父に「行儀が悪い」と怒られたことを覚えています。兄や妹と違い、私は相当ヤンチャだったのです。山の麓にある学校に行ってくると言っ、ガキ大将と山で遊んでいたこともしばしばでした。

また棚田には、上の方に給水のための池があるわけなんです、鯉や鮒が沢山いて、それを捕るために水を抜いたり…なんてこともありました。もう怒られるどころの話じゃなかったですね。

それから果実泥棒。ぶどう、桃、梨など地元は果物の宝庫なのですが、わざわざ隣の部落まで盗みに行く。よく見つかって大人に追いかけるんですが、そのスリルがたまらなかった。夏にスイカを採りに行ったら運ぶのが大変なので、その場で割って食べたなんてこともありました。

そんな私に対し父は鉄拳制裁を加えることが日常茶飯事でした。とにかくワンマンで問答無用で殴る。母がかばってくれるのですが、止めることはできず、逆に母が「お前の躰が悪い」と叱責される始末でした。いまみたいに男女平等ではなく、家庭を支えている主人が絶対という時代でした。父に何かもらったり、褒められたりといったことも一切なくて、だから父が嫌いで嫌い

でしようがなかった。

一度ケンカして友達目を傷つけたことがあるんです。失明するかもしれないと相手の親が怒鳴り込んできた。そのときの父は本当に怖かったですね。なにしろ日頃から「絶対に人を絶対つけてはいけない」と言われていたのですから。滅茶苦茶に殴られた。ノックアウトされたボクサーよりもひどいほど顔が腫れ上がり、三日ぐらい学校へ行けなかった。父を憎みましたね。早く家を出たいと思った。そんな父の偉大さが分かったのは大人になってからです。

三年前に父が亡くなったのですが、私はこう挨拶しました。

「オヤジをいまでは尊敬していますが、青年期に入るまではイヤでイヤでしようがなかったのです。大嫌いでした。でもやっとこの年になって、仕事一筋に生きた見本、その生き様、父の偉大さが理解できるようになりました」と。

ここで少し父の人生について触れておきたいと思います。父・武夫は五男五女の十人兄弟の三男として生まれました。祖父・小林市左衛門と祖母・カネが大正時代にペルーに移民しそこで生まれた子供でした。当時、小林家は日本に家屋、田畑などを多数所有していたため、誰かがそれを継がなければならなかった。そこで白羽の矢が立ったのが私の父だったのです。一家が一時帰国をしたとき、理由ははっきり分からないのですが、父が家督として選ばれた。そして残りの兄弟は一部がこちらに残り、あとはみなペルーに帰ることになりました。

しかしいざ帰ろうというとき大東亜戦争が起きたんです。一家はペルーへの入国を拒否されました。「日本は戦争を起こす国なので、受け入れることはできない」と。一家は行き場を無くし入植できる場所はないかとあちこち当たり、最終的にパラグアイに辿りつきました。そしてその後ブラジル、アルゼンチンと離散していくことになったのです。現在、私の親戚はペルー、アルゼンチン、パラグアイにいます。

一方、日本に残され家督を譲り受けた父は百姓を始めました。山ひとつを譲り受けたのですが、その中に十ほどの棚田がありました。農地は平地ではないので資産としてはそれほどでもなかったのですが、昔の人にとっては山は非常に価値があるものだった。当時外材はほとんど輸入されてなく、松や杉などは建材、あるいは薪としても重宝がられました。木材は生活の中で重要な位置を占めていたのです。

不慣れで知識もなかった父は農業ではなかなか稼げなかったようです。農作業は近代化されておらず、牛を使って田畑を耕すような感じで、一生懸命やってもなかなか儲からない。一方では税金が容赦なくかかってくる。それを払わなければ土地は没収され国有地になってしまう。そのため父は食い扶持を求め軍隊に入らざるを得なかったようです。田畑は他人に任せ、広島県、呉市に赴任しました。軍隊では相当きつい教育を受けたと聞きます。これが、私に対する厳しい躰の原点だったかもしれません。その後幸運なことに父が戦地に赴くことはなく、終戦を迎え母と無事岡山に戻ってくることができました。そして私が生まれたのです。

父と母が出会ったのは広島県呉市でした。当時父は下士官という地位にあり、主に船の修理、溶接などをやっておりました。母の旧姓は住本。父親は石工でその名は宮島の鳥居にも残っている

匠です。

二人の結婚にはちょっとした問題があったんです。それは住本家の家督に関することでした。母は一人娘だったために親が「娘を嫁には出したくない、住本家を絶やしたくない」と訴えてきました。そのため父は子供が生まれたとき嫡男は住本家の養子にする、という条件で結婚したのです。そして兄は生まれたとき約束通り住本の姓を名乗り、次に生まれた私は小林家の嫡男ということになりました。

同じ家において、血が繋がっているのに兄の姓だけ違う。家に長男が二人いる。兄弟なのに小林じゃないのはなぜ？ 幼いながら私は戸惑いを感じていたことを覚えています。そしてこのことは、後々兄の人生を大きく左右することになります。

しかしながら、私たちが幼い頃、両親は子供たちには平等に愛情を注いでいたように思います。姓の異なる兄と私でしたが、兄弟間の差別はなかった。それでも兄は窮屈に思っていた部分もあったと思います。



紫陽花。自宅の近くにて

人生の進路が決まった高校時代

一方私は学業の成績も良くなく高校に入るときは大変でした。勉強をしてないわけだから進学校に行けるはずもなく、貧乏だったため私立は論外で公立高校しか選択肢はなかったのです。

父には「将来大学へ行きたい」と言ったのですが「岡山大学以外はダメだ」と言われました。岡大はかなりの狭き門。そこで大学はあきらめ、就職のために手に職をつけようと工業高校を選択しました。岡山県立工業高等学校——歴史のある学校で私は電子科に合格。両親はさぞかしホッとしたことでしょう。

ところが入学してしばらくしたある日、私は担任の先生に親と一緒に呼ばれたのです。そして単刀直入言われました。

「あなたはギリギリで入学できた。及第点で入ってないので、相当勉強しないと卒業できませんよ」

聞けばかなり落第率の高い学校だった。私は焦りました。でも長年の習慣はなかなか直らないもの。一年のときにはまったく勉強に身が入らなかったのです。

その頃何か部活を始めようかと思っていたのですが、ちょうど友達がラグビー部に入ったというので、私も軽い気持ちでやることになりました。でもすぐに後悔することに…。というのも練習が相当きつかったのです。

当時の高校ラグビーは、まず県大会があって、それに優勝すれば花園に出られる。岡山県リーグは全部で六校あったのですが、我が校はなかなか一位になれずつねに二、三位。そのためOBがいつも指導にくる。みな激しく叱責されていました。我が部は部員も少なく一年生はしごきの対象でした。そんなこともあって部活はイヤイヤやっていた感じですが、なぜか手は抜けなかったですね。もしかしたら家に帰って手伝いをやらされるのがイヤだったのかもしれない。

当時学校へは、片道一時間ぐらいの道のりを自転車で通っていました。行きは下りだから楽でしたが帰りが大変。部活でヘトヘトになった体で急な坂を上がっていく。途中でペダルをこぐことができなくなったこともしばしば。でもこれで相当足腰が鍛えられました。おかげで病気はほとんどせず、学校を休むことはまずありませんでした。

また休日には農作業の手伝いをさせられましたね。時間がいくらあっても足らず、おかげで不良にならずに済みました。

そんな中でちょっとした息抜きになったのがバンド活動でした。仲間と組んでやっていたのですが、私の担当はギター。その頃は、キングストントリオやブラザース・フォーとかアメリカのフォークソングが流行っていて、それをコピーして遊んでいました。そのうちなんとか人前に出せるレベルになって学園祭にも出たのですが。

当時大阪の毎日放送で「ヤンリク」というラジオ番組があって、土曜日の夜にオンエアされていた。それを聴くのがすごく楽しみで、徹夜勉強もしばしばでした。全盛期のビートルズやベ

ンチャーズもヤンリクで知って大きな影響を受けました。自分でもコピーしたりしてね。で、一大エレキブームがやってくるんですけど、日本でも同様にワイルドワンズやテンプターズ、タイガーズと言ったバンドが出てきました。ちょうど東京オリンピック開催の年でカラーテレビが発売された頃ですね。私も例外なくそういうのにかぶれていきました。

私の担任は一年は秋山、二、三年は安井という先生でした。安井先生は東京の電通大出身でかなりユニークな先生でした。三年の春のことです。ある日職員室に呼ばれ、就職先について「あなたはこの会社に行きなさい」と決められたんです。

当時は就職先を学校側が決めていたので、自分の希望が通らなかったのです。成績順に一番が日本電気、二番が三菱電機、三番がNTTといった感じで勝手に決められていく。私は一年の頃はあまり勉強しなかったんですが、二年からさすがに焦り始め必死で勉強するようになった。一夜漬けが多かったけど試験の時はいつも徹夜して、テストだけは絶対外さないようにした。そのおかげで三年では学年で五番目ぐらいの位置に上がることができたんです。

で、成績五番の私が一番最初に勧められたのが川崎製鉄でした。でもここは縁故が強く我が校から五人受けて一人しか受からなかった。もちろん私はダメ。そして次に来たのが日立の関連会社（現・日立ソリューションズ）の話でした。

試験会場は岡山から遥か離れた戸塚。私は夜行急行「瀬戸」、夕方六時岡山発の列車に飛び乗り現地へ。列車は朝六時に到着。不慣れな電車泊で眠い目をこすりながらそのまま試験会場に向かいました。試験は筆記と面接がありましたが、なぜか緊張することはなかったですね。自分でも満足のいく感じだった気がします。

試験が済んだら観光もせず、またすぐ「瀬戸」に乗って岡山にとんぼ返り。家に帰って合否の知らせを待とうと思ったのですが、なんと帰るより早く電報で合格通知がきていたのです。これには驚かされました。そのときの母の喜びの顔、決して忘れられません。厳しい父もホッとしたのか柔らかな表情になっていましたね。

就職先はこれで決まりました。いまでこそ複数の会社を受けて合格した中から就職先を選べる時代ですが、私の時代は、一社決まると他は受けさせてもらえなかった。

このように「自分では決められない人生」ではありましたが、就職で私の将来が大きく変わったのです。

そして無事卒業式を終えて上京の日を迎えました。わざわざ駅まで私を見送りに来てくれた母親の姿は一生忘れられません。スーツ一着と布団一式を運んで渡してくれました。それを駅に預けて、チッキ（預り証）を受け取り母に深々と別れの挨拶をしました。そのとき母の目が涙で潤んでいたことをいまでもしっかり覚えています。



岡山から船で一時間の小豆島。母と妹を連れ一泊二日の親孝行の旅に

生涯の礎を築いた日立時代

岡山から戸塚へ――。こうして私は安井先生が決めた人生のレールに乗り、見知らぬ土地での新生活を始めることになりました。

入社は昭和四十二年。当時日立には毎年百五十人ぐらゐの高卒が入っていたのですが、私が配属されたのが現在のIT、電子計算機部門・検査部でした。ソフトの開発をするのに設計と検査があつて、検査部は完成したソフトをテストするのが主な業務。テスト項目を作つたり機能一覧を作つたりという仕事をしていました。

勤務地は戸塚の日立神奈川工場、初任給は一万四千元でした。いまに換算すると十五、六万円ですかね。一方大学卒は二万円ぐらゐもらつていて、学校を出てすぐに学歴による格差をまざまざと見せつけられたわけです。

私は寮住まいで作業服は支給。朝晩の賄いで給料から五千円ぐらゐ引かれ、自分が自由に使えるお金は六～七千円ぐらゐでしたかね。当然派手な遊びはできないでわけです。パチンコも覚えないようにしていました。当時は百円でも非常に貴重でしたから。でも飲酒でお金がなくなることにはなかつた。その頃私はお酒をまったく飲めない体質だったんです。そういう家系なのでしょうか、家族もみんな下戸。でも、いまでは鍛えてかなりの量飲めるようになりましたが。

寮は四人部屋で戸塚区中田町にありました。戸塚はベッドタウンであるとともに、その頃は日立村と呼ばれ多くの寮があり社員が住んでいました。いま行くとても懐かしい感じがします。

夏休みには仲間とよく旅行に行っていました。検査部に高山崇行という先輩がいたんですが、その人が中心になり西伊豆の土肥や雲見、下田、あとは伊豆七島、式根島や大島などあちこち行っていた。時には石川県の輪島とか宮崎の青島など遠出しましたが、旅行は比較的海が多かったですね。

とくに伊豆七島の旅は思い出深い。一番安い客船に乗って夜十時頃出て、船中雑魚寝をしながら早朝に到着。日中は海水浴や素潜り、夜は宴会、と本当に楽しかったです。

その頃横浜にライブハウスが二箇所あつてよく仲間と行っていました。当時はエレキブームで、ゴールデンカップスとか内田裕也といったミュージシャンが出演していました。沢田研二なんかも出ていましたね。その仲間の一人に後に結婚する女性がいたんです。

妻と会つたのは十八歳のとき。会社の同期でした。最初はグループで遊んでいて、木更津のマザー牧場に行つたりしてね。牧場ではフォークギター片手に彼女の前でちょっとキザっぽく演奏したり…。その頃は吉田拓郎とか泉谷しげる、井上揚水といったミュージシャンが活躍していて彼らの曲なんかを演奏しました。当時は安保反対運動なども起こつていて、世の中は反戦ムードでしたが、フォークもそんな感じでしたね。そのうち妻と交際するようになりました。

会社員時代はこのように適当にガス抜きをして仕事の方は無難にこなしていました。とくに父に「五年は帰ってくるな」と言われていたのを忠実に守っていた感じです。でも次第に社会の

矛盾を痛切に感じるようになってきたんです。日立は学閥があって、高卒か大卒かで将来が大きく変わる。道が違う。乗るレールが違う。

学歴に対する劣等感から夜学を目指したこともありました。神奈川大学の二部に入ろうと一年間受験勉強をしていたんです。仕事が終わると自宅に直行し机に向かっていた。でも学業と仕事は両立しなかったですね。そのうち「日立にいても課長で終わりだな」という諦めに似た思いを抱くようになりました。また会社に行ってもつねに劣等感がつきまとうようになったんです。

ちょうどそんな不満を抱いていた頃妻と結婚しました。二十三歳でした。すぐさま寮を出て所帯を構えなければならなかった。でも安月給では二人で生活するのはきつく、悩んでいたところ、日立のOBから転職の誘いを受けたんです。

「高卒だから日立にいても偉くなれないぞ。給料も安いだらう。それだったらのびのびと実力主義でやっていけるところに入らないか」と。

誘われたのはそのOBが作った渋谷のランドコンピュータという会社。中堅のソフトハウスで当時従業員数は百人ぐらいでした。

私は悩みに悩み、高山先輩に相談しました。先輩は猛反対。その話はやめたほうがいいと。一方OBは是非来いと。しばらく綱引き状態が続きましたが、悩んだ末日立にいてもしょうがないという結論に達しました。女房を食わせていかなければならない。背に腹は代えられない…。多少なりとも条件がいい方へ行こうと。

妻は辞めることには反対しませんでしたね。むしろ「自分が好きなようにやったらいい」と、後押ししてくれたんです。

結婚と転職――。これが私の2つ目の大きな人生の分岐点でした。

思えば不思議なもので、安井先生に決められた進路で日立に入ったのがITの世界で生きるきっかけになった。そしてそれを踏み台にしてキャリアアップして行ったのです。

私の時代の同窓は絆が強いんです。いろんな意味で悲哀というか、「自分で決められない人生」を経験し社会に出て苦労した仲間たち。私のように起業した人間はまれで、日立で定年を迎えた人がほとんどですが、なにか心が通じ合うものがありました。同窓会にも何度も行きました。

そうして私は新天地へと向かったのです。ちょうど入社して五年目。父の言葉をなんとか守った形にはなりましたが…。



大好きな海南島の海口にて。温暖な気候でとても過ごしやすい場所だ

転職、そして独立

ランドコンピュータに転職して最初についたプロジェクトが、日本橋にあった東京銀行（いまは合併して三菱東京UFJ銀行）の基幹システム管理でした。当時は富士通のコンピュータが入っていて、そこでSEを担当し、後に池尻大橋の事務センターに異動し一年近くいました。

ここではオンラインの設計、プログラムの製作などの仕事をこなしました。でもこの会社は私の思い描いていたイメージとはどこか違っていたんです。日立の方が仕事は面白かった。ランドコンピュータは下請けでしたしね。

会社は田村一族によるオーナー経営でした。この田村さんというのは渋谷女子高や目黒高校、多摩大学とか学校を六、七校持つ有名な人だったんですね。東大出で教育臨調の委員もなさっていた。その人が出資し日立のOBが作った会社だったんです。ソフトハウスの走りで規模は比較的小さかったのですが、資金面での問題はなかった。また他にも「渋谷コンピュータ学園」という専門学校を経営していました。ITを志す学生がそこに入って学び、卒業後にはランドコンピュータに就職するというコースができており、会社は卒業生と外からヘッドハンティングされて入ってきた社員で構成されていました。

当然先に入っていた卒業生組は面白くなかったようですね。ヘッドハンティング組は優遇されてんじゃないか、と。そうしたやっかみのせいで、私はどちらかと言えば冷たい目で見られる立場に置かれていた。最初はたいして意識はしてなかったんですけど、そのうちどうもやりづらいな、という感じになってきた。

私は一年ぐらいで退社を考え始めました。しかしすぐには辞められなかったんです。というのも入社時新居を構えるのに敷金、礼金が出せなくて、ランドコンピュータに肩代わりしてもらい社宅扱いになっていた。だから辞めるに辞めれなかったわけです。社宅を出て行けて言われたら家族が路頭に迷うわけですね。それで二年我慢した。生活はいっぱいいっぱいだったし、当時二十六歳で最初の子供ができたばかりだったんです。

皮肉なことに日立とは逆で、他者より優遇される立場になったわけですが、かえってそのせいで出世も難しくなり仕事も自分の意のままにはならない。これは自分が志していたものとは全く反対の結果です。

私はこう思いました。

「人に使われるのは一番下の兵隊であろうが、ナンバー2であろうが、上司がいる限りは服従には違いない。結局自分のしたいことができない。最終的にはやはり独立するしかない」と。

そこで思い切って二年勤めたランドコンピュータを辞めることにしました。これが私の三つ目の転機です。

会社を辞めてからは、二年ぐらいフリーでSEをやっていました。ランドコンピュータ時代に意気投合した仲間二人とともに仕事を始めたんです。

私が営業を行い、もらってきた仕事を三人で手分けしてやる。私は日立関連会社のSEを担当しました。その会社は日立と富士通が作った合弁会社だったんですが私は日立側のSE。ここは

官庁、国公立大学、財団や国立の研究所とかのシステム設計・管理をやっていたんですが、仕事も多く三、四年食いつなぐことができましたね。

でもフリーというのは信用でもお金の面でも微妙なものがあつたんです。そこで一九七七年十二月、有限会社システムシンクを立ち上げました。会社名のシンクは「シンクタンク」から取ったのですが、人からよく言われました。「流し台でも作ってるんですか？」と。どんな流しだと。

「それは違いますよ、THINKなんです」と言ってもなかなか理解してもらえませんでしたね(笑)。

業種はITでスタート。お金がないので親から五十万円を借りて資本金に当てました。独立時、株式会社は資本金が百万円以上ないと設立できなかつたので、必然的に会社の形態は有限会社ということになったのです。

事務所は菊名のアパートで自宅兼事務所で始めました。SEということで仕事はほとんど外でやっていたので広いスペースは必要なかつた。経営事務は妻にやらせていました。

私は足を棒にして営業に駆けずり回り、その甲斐あつて順調に仕事が増えていきました。当時は初任給が十万あるかないかの時代でしたが、妻と二人でなんとか食べて行く収入を得ることができた。なにより会社員時代に受けたようなストレスがなくて仕事に専念できることが嬉しがつたんです。また時間をみつけては会社の仲間とバーベキューをやったり、旅行に行ったりと充実した毎日を送っていました。

会社自体は縁故、知り合いを社員にして五人、十人と増えて行きました。でも残念なことに設立当時のメンバーは方向性の違いから五年目ぐらいに辞めていったんです。

六年目には有限会社から株式会社へと移行できました。それでも会社を立ち上げてから七、八年ぐらいまでは相当苦労しましたね。自分自身二足のわらじでしたし、人を使つたこともなかつたのでまさに手探り状態。日々の業務の中で経営について学習しながら進んで行つたという感じでした。

そして十年目ぐらいにやっと経営に専念できるようになった。ちょうどバブルが始まつた頃です。

バブルの威力は絶大でした。面白いほど仕事に来る。社員も二十人、四十人と倍々で増えていった。事務所も渋谷に移しました。その頃は逆に人材集めに苦労したぐらいです。売り手市場で専門学校卒でも自分の名前が書ければ入社させていた。大卒を入れるというのは大変だつたんですよ。といつても、専門学校生はITの基礎はできているので非常に役に立つてくれましたね

社員は最盛期には七十人ほどいましたね。オフィスも一箇所では足りず渋谷に全部で三箇所借りていました。朝の日課はすべてのオフィスを回ること。打ち合わせのため駆けずり回ることもしばしば。当時は黙つても仕事があつて業績も右肩上がりで天井知らずでした。

また金銭的にも時間的にも余裕があつたのでレクレーションにも力を入れました。社員旅行で海外に行つたり、社内に野球部を作つたりして。野球はよく(株)リコーと対抗戦を行なっていました。我社のチームの名前は”WINNERS”。勝つ軍団。最初は野球部というよりスポーツ部と

呼んだほうがいい感じで、ユニホームもバラバラ。各自が適当に準備していた。それを相手チームに笑われたので悔しさのあまりユニホーム作りました。で、一応形は整ったんだけど、最初はバスケットボールカウントぐらい負けてね。面接のときには、「君は野球できるか？」と、それ最優先で採用していました(笑)。今考えればじつに平和で幸せな時代だったんですね。



海南島のビーチ。夕暮れ時に佇みながら

兄との思い出

さて肝心の仕事の方ですが、その当時ITはほとんどメイドインUSA、新しいものはすべてアメリカにあるというのが実情でした。それで何度も現地に視察に飛んだんです。とくに目当てだったのがCOMDEXというITのショー。シカゴとラスベガスで交代で開かれていて十万人以上の方が訪れる。ここではITの最先端を見て学ぶことができるわけです。じつはこのIT行脚のおかげでしばらく途切れていた兄との交流が復活したのです。

ここで少し兄の人生について話しておこうと思います。兄は岡山の夜間高校を卒業して自衛隊に入りました。貧乏だから夜間しか行かせてもらえなかったんです。それで陸上自衛隊の普通科連隊に配属され、香川県・善通寺の教育訓練所に一年ぐらい行ってましたね。そこから全国に散らばるのですが、兄が配属されたのが北海道・真駒内。普通科連隊の射撃・砲弾部隊に入っていました。

当時、私は室蘭で日立の仕事をしていましたので、出張の帰りがけに休暇をもらって、何度か兄に会いに行っていました。

兄は自衛隊に何年かいたんですが、先が見えたんでしょうか、突然YMCAに行って英語の勉強をし始めた。自衛隊勤務の合間にだったから相当大変だったでしょう。聞けばアメリカの大学を目指すという。成績もよく、自信があったんでしょうね。YMCAを卒業したあとアメリカに単独渡りました。

でも実際行ってみたところがヒアリングが全くできなかった。これは致命的です。日常生活に相当支障が出る。現地の人に相手にもされない。それで半年間向こうの語学専門学校に通いながら大学を目指しました。でも最初の二年は短大にしか入れなかった。アラバマ州の学校だったんですが、兄が目指していたのは四大でした。当時TOEICの試験で五百点以上ないと四大は無理だったのです。

日本人はスピーキング、リーディング、ライティングができてヒアリングができない。ネイティブは主語をあまり言わないし早口で喋りますから。それが聞き取れないと授業についていけないということになる。そのため兄は相当な時間を浪費し、途中なんとか短大からルイジアナ州立大学に転入することができたんですが、結局大学を卒業するのに七年もかかってしまった。

当時は相当な苦学生だったみたいです。留学目的で学生ビザで行ったため就業もままならない。それでもみなこっそりバイトをするわけなのですが兄は言葉がうまくできなかったため雇ってもらえなかった。

あとで聞いて思わず涙したのですが、短大に通っていた頃バスに乗っていて疲れて寝てしまったというんです。起きると財布からパスポートからすべて盗まれていた。途方に暮れ警察に駆け込むも言葉がまったく通じない。わずかなお金をなんとか借りることができ家に帰ったらしいんですが、そんなことの連続だったということです。

また卒業したら就業してない限り不法滞在になるということで、急遽出国履歴が必要になり、長

距離トラックをヒッチハイクしてカナダを往復したなんてこともあったとか。そのうち親が見るに見かねて仕送りをしてあげてみたいですね。別姓を強いたという負い目もありましたから。

卒業後アメリカに慣れてきても、兄はなかなか就職できなかつたみたいですね。フロリダに移り住んで日系のレストランで皿洗いの職についた。そのうち「ヤマト」というレストランで寿司職人や板前をやるようになった。当時アメリカでは就労ビザを持っていたとしても、資格なり博士号なりを持っていないとなかなか仕事にありつけない状況でした。また兄が住んでいた南部は差別も強かつたようですね。

一度私は兄に「わざわざ大学出て、ちっぽけなレストランでこきつかわれて、そんな仕事はないだろう」と言ったんですが、兄は分かつて、「あくまでもこれはバイトだ」と。それで何年かしてコインビジネスを始めた。場所を借りてランドリーマシンを何台か設置するんです。ターゲットは低所得者層でした。でもこれもうまく行かなかつたようですね。

しばらくして兄にチャンスが巡ってきます。アトランタで旅行会社をやっている人と知り合つてその人の協力で自ら旅行会社を始めた。ジョージア州は優遇制度があつて日本の企業がものすごく多いんです。ビジネスマンやその家族が多勢いて、彼らにチケットを手配したりツアーを企画したりしていました。ちょうどその頃アトランタでオリンピックがあつて、それが追い風になりかなり儲かつたようですね。最初兄に会つたときはいつ止まるかわからないようなボロ車に乗ってましたが、あとで行つたときはグレードアップしてホンダのシビックに乗っていましたね。

そのうち兄は音楽でも稼ぐようになりまして。最初はフォークギター片手にストリートで演奏していたようですが、次第にイベントなどで演奏するセミプロとして活動するようになった。本人も「音楽に救われた」と言っていました。

兄が住んでいたのはフロリダ州のペンサコーラという街でした。州の北西端に位置する湾岸都市で、歴史的にはスペイン、フランス、英国、南部連合、現アメリカ合衆国の五つの国家に属したことから「五旗の街」と呼ばれています。また全米有数のアメリカ海軍航空基地があり待機軍人が大勢住んでいました。彼らの中には日本に滞在した人も多く、アメリカ人と結婚した日本人女性が結構いたのです。

私は兄のところを何度か訪ねましたが、初めて訪問したのは三十歳のとき。最初は「本当にいるのか」とかなり不安でした。国際電話もそれほど普及していない時代だし、もちろんメールなんていうものはなかつたんです。それで「これこれこういう予定で行く」と手紙を出しました。すぐに返事など来ないので私は手紙を待たず現地に向かつた。まずはシカゴに行ってCOMDEXのショーを見てフロリダへ。オーランドに一泊して、次の日はケネディスペースセンターに立ち寄つた。ここはメリット島にあるアメリカ航空宇宙局(NASA)の宇宙船の発射・管制施設です。マイアミとジャクソンビルの中間のケープカナベラル付近に位置しています。観光客向けにアポロのランチャーロケットなどを展示していたりして非常に面白かつた。そのあとペンサコーラへ。

現地に到着して兄の住まいに向かうと、遠くで手を振ってるのが見えた。感激しましたね、久々

の再会でしたし。兄は家を持っていて三泊か四泊はしたでしょうか。あちこち観光に連れて行ってもらいましたが、とくに印象深かったのは映画『ジョーズ』の撮影場所としても有名なペンサコーラビーチ。そこは九十九%石英で出来ている真っ白な砂浜でした。エメラルドグリーン
の海。思わず息を飲む美しさでした。近くの桟橋で兄と釣りを楽しみました。下に大きな魚が何匹も泳いでいるのが見えるのですがまったく釣れない。でも楽しかった。なんか素晴らしい環境に住んで、のんびりと生活している兄がちょっとうらやましく感じられました。

その後も何度か兄のところを訪ねたのですが、一度ラスベガスのCOMDEXのショーで通訳をやってもらったこともあります。高い時給を払ったのですがIT関係の用語が分からなくてあまり通訳にならなかった。それでも英語はかなり上達していましたね。これは余談なのですが、兄は『風と共に去りぬ』の和訳本で解説を書いているんです。向こうでアメリカ史を専攻していたのでたまたま白羽の矢が立った。

まあこうして何度か兄の元を訪ねたわけですが、初めのほうはお互いにわだかまりというか、別姓のため疎外感があったのか、何か溝がある感じがしました。本当に交流するようになったのはもう少し後、私が四十代の頃ですか。

その頃には兄は向こうで知り合った女性と結婚し、女の子をひとりもうけていました。奥さんはブリティッシュ系のアメリカ人。親戚には弁護士が多いという優秀な家系です。姪は非常に優秀な子で、天才と言ってもいいかもしれない。

兄もなかなか日本には帰ってこなかったんですが、父が交通事故で入院したことを聞きつけ四十年ぶりに突然帰郷しました。当時父は八十歳。バイクで事故を起こしたんですね。バイクと言ってもカブだったのですがヘルメットをつけてなくてね。頸椎の損傷で左半身と下半身が不随になってしまったんです。それでもリハビリを続け、最後は歩行器を付けた状態で歩くまでになったんですが…。

リハビリは病院付属の介護施設に入っていました。私が施設に行くと、兄がたまたま二度目の帰郷をしていたんです。アメリカ人の奥さんと娘も一緒だった。

介護施設にはこれと言った娯楽がないのですが、兄がギターを披露していた。久々に会った兄はフレンドリーで、オープン。そして明るい。「今日は今日、明日は明日」そんな性格になっていましたね。

父が亡くなって今年で四年経つのですが、葬式の連絡をしたときは兄は帰ってこれなかった。非常に残念でしたね…。



故郷には果物が豊富に成っている。子供の頃は私も兄もこれがおやつ代わりだった

海外で得たもの、学んだこと

私は仕事でもプライベートでも、何度も海外に行っています。台湾、中国、香港、シンガポールなどの近場はもちろん、最近ではバングラデシュなど遠くまで足を運んでいます。また先に述べたCOMDEXのITショー関連でアメリカには頻繁に渡っていました。

海外に行ってもまず突き当たるのは「言葉の壁」。こんなことがありました。確か一九八八年のこと、ショーを見てから兄のところに立ち寄り、帰国のためペンサコーラからロスアンゼルスに向かう途中でした。なんと旅客機が大幅に遅れたのです。ロスアンゼルスに到着したときにはトランジットの時間を過ぎていた。当時は二時間前に手続きしなければ、国際線のトランジットはできなかつたのです。

私はなんとか交渉しようとカウンターに行ったのですが、片言の英語だったため全く相手にされず終い。挙句の果てにはミールクーポン付きの安いビジネスホテルのチケットを手渡されて、放り出されてしまった。これは非常に屈辱的でした。

その後も何度か同じような体験をしました。タクシーで百ドル札を出したら突然運転手が怒り出した。相手がまくし立てるものだから、最初はなんで怒っているのか分からなかつたのですが、どうやらおつりが無い。そもそも百ドル札など出すな、と言っているようなのです。結局ホテルに戻り両替をしてもらって事なきを得たのですが、このときも英語がもっと出来ていたらスムーズに解決できたかもしれません。

英語の必要性を痛感し、私はある日一大決心をして英語学校に通うことにしました。最初はECCでしたかね、五年通いました。そのあとベルリッツに三年、またプライベートな英語教師を雇い個人授業を受けたことも。おかげでなんとか英語が上達し、いまでは外国に行っても日常会話なら何の支障もなくできるようになりましたね。もちろん難しい専門用語などは分からないときはありますが。

英語は決してアメリカだけで役立つものではありません。先日バングラデシュに行ってきたのですが、現地の公用語はベンガル語。でもこれは難し過ぎて、あいさつをするだけでも一苦勞です。そして第二外国語が英語なんです。私は勉強したおかげで、向こうの人と普通にコミュニケーションを取ることができ、友人を得て、また見聞を深めることができました。

アメリカ旅行ではいろいろな経験をしました。とくに印象深かつたのは友人と行ったシカゴの旅ですかね。その時はたまたまシカゴでCOMDEXのショーが開かれていました。

到着してまず空港の広さに圧倒されましたね。トランジットのために地下鉄が通っていますが、どこに乗っていいやら全く分からない。それでもなんとかショーの会場に着き当初の目的を果たすことができました。

次の日は観光です。シカゴは貿易や金融の中心地であり、街中はビルが乱立しています。エリクソンなど、大手の保険会社もここに拠点を置くほどのビックシティ。また観光地で言えば、まるで海のようなミシガン湖やアルカポネの定宿、モハメド・アリの生家など枚挙にいとまがない

。

私がとくに感動したのはミシガン湖の船に乗ったことです。外海からミシガン湖に入るのに、まるで階段を上るかのように進んでいくのです。いわゆるパナマ運河方式とでもいうのでしょうか、一つ目の階段に乗せて水を注入し、船を上げゲートを開き次の段へ移る。そのスケールの大きいこと。さらにミシガンから見たシカゴの夜景の美しさときたら、比べるものがないぐらいでした。

そうして夜になって、友人が突然「ダウンタウンのポルノ映画館に行ってみよう」と言い出した。絶句しました。そこは添乗員に絶対に行ってはいけない、と念を押された地域だったのです。私は止めたのですが、友人は絶対行くと言い張る。それでしかたなく同行することにしました。

シカゴは人口の四十五%が黒人で、居住区域が北と南にはっきり分かれています。北は白人で南は黒人。そのダウンタウンは南にあります。夜タクシーを降り映画館へ向かうと案の定大勢の黒人がたむろしていました。みなじっとこちらを睨んでいる。私は生きた心地がしませんでした。「絶対に目を合わせないこと」そう現地の人にアドバイスされていたのでひたすら前を向いて進みました。映画館に着くと入口には制服の警官が。腰には銃を下げていて、私の脳裏には「ホールドアップ」という言葉がよぎりました。

中に入ってからあまり覚えていないのですが、前列は危険なので避け、一番後ろの席で、いつでも逃げられる体勢を取っていたと思います。友人は平気な顔をして映画を楽しんでいましたが、私は映画どころではありませんでした。

そして映画が終わり、帰りも同じように人の目を背中に受けながら無事ホテルに帰還しました。そのとき出た言葉は「命拾いした…」。この一言でした。

でもこれで相当度胸がつきましたね。このときは英語はまだ未熟でしたが、日常会話が普通にできるようになってからは、堂々と現地の人に接するようになりました。

一度ホテルに日本人目当てでやってくるコールガールの値段交渉をやらされたことがあります。私は興味なかったし嫌だったのですが、ツアーの同行者たちが「英語ができるあなたしかできない」とおだてられて。百ドルを八十ドルまで下げてあげましたね。

いまではアメリカに行っても街中で現地の人に気軽に話しています。やはり英語ができないと分かると相手もスーッと逃げて行ってしまいうし、旅が単なる観光で終わってしまう。

もっとディープな部分を知りたいなら、やはり外国語は絶対条件なんです。そうして見聞きしたことが、自分の経営者としての大きな財産になることをつねに願っています。

ちなみに私のアメリカでの感動のベスト3は、ケネディ宇宙センターで見たランチャー、グランドキャニオン、そして先述のミシガン湖の夜景です。グランドキャニオンは息子とも兄とも行っており、何度も足を運びたくなるおすすめのスポットです。



三亜の国立亜熱帯植物園にて

経営者として自分を鍛えた時期

思い返すと独立して十年間はとにかくがむしゃらな毎日でした。右も左も分からなかった感じです。なにしろ当時はIT系で手本になる会社もなかった。たとえばソフトバンクの孫社長でさえ、ソフトウェアの小売業をやっていた時代でしたから。

当時私の会社のお客さんには上場企業も多く、経営が軌道に乗ってくるとさまざまな合併・吸収の誘いが度々ありました。でも自分にとっては関連会社になるということは上司がいるのと変わらない、それがイヤで会社を辞め起業したんだ——そんな思いがあり、みな丁重にお断りしました。

要はお山の大将というんですかね。それをずっとやってきた。ナンバーワンでやるということは、良いこと悪いこと全部自分に跳ね返ってくる。それは苦しいけど、喜びでもあるんです。だから他社に依存するということはなかった。

経営者は孤独な存在だと実感しましたね。他人が育ててくれるわけじゃない。だからこそ一人前になるためさまざまな勉強をしました。経営に関する本を読んだり、人の意見を聞いたり。で、一番印象深かったのが「ビジネスコンサルタント（BCo n）」という会社が主催したセミナーでした。一度人間工学に関する経営者の講座に参加したのです。

一九八七年の秋。セミナーは成田のホテルを借り切って開かれ、一週間朝から晩まで缶詰め状態に置かれました。講習料は二十五万円と決して安くはない金額。

まず初日に何班かに分けられます。一班十人ずつでそれが六チーム。メンバー間では名前と年齢以外は言わないことが条件。そしてグループでさまざまな共同作業を行います。作業は主にディスカッションでテーマは自分たちで決める。主催者は口を出しません。それは生き方でもいいし、会社でもいいし、人間関係をどうしたらいいか等々。とにかく無題なんです。そうして無から有を作り上げ、最後は総仕上げで「会社はこうがいい」「生き方はこういうのがいい」という結論を導き出す。最初はみな個性的で話がうまく噛み合わず、あーでもない、こうでもないと言文句を言う人が出てくる。そこで生意気な人は叩かれたりしていましたね。しかし一週間もすると阿吽の呼吸が出来てくるわけです。

じつはこれは価値観を共有する訓練だったんですね。共通の目標、価値観、モノの考え方をいかにして形成していくか。そのプロセスが目的であり人間工学と呼ばれる所以だったんです。

もともと人間工学という理論は日本にはなくて、アメリカの会社が所有しているものを立教大学が一早く導入した。そして立教大学とビジネスコンサルタントが共同開発したもののなんです。ですから理論的にもじつにしっかりしており、時代に関係なく使える手法だと言えます。これは私の中では大きな財産になりました。またその当時、人間工学、経営工学のバイブルだったP.F. ドラッガーの著書をかなり読みました。

セミナーでは毎朝七時からBCo n社長の吉田氏による講演がありました。この方がじつに熱心で、じつはそんな講演はプログラムにはないのですが「聴きたい人は来い」と、社長が熱意で

始めたことだったんです。私は必ず参加していました。ものすごく迫力がある方でね。人を見る力とか経営とは何かとか、人生の哲学そのものを教えてもらいました。

またここでは現・東急不動産の顧問で、昨年まで会長だった植木正威さんと出会いました。同部屋だったんですが、そのときは私的な話よりはセミナーの話で意気投合してね。宿題もあったので酒なんて飲む暇はなかったですが、時間を見つけてはいろいろ語り合いました。当時は、東急ホームの常務をなさっていたのかな。非常に実力のある方で、不動産のバブルを整理して会社の業績をV字回復させた人です。植木さんとはセミナーが終わっても長いお付き合いをさせて頂いています。

じつは私も社内で同じ価値観持つため管理者教育を行なったことがあります。これにはセミナーをきっかけに知った人間工学のプログラムを使いました。やはり管理者と社員が価値観が異なるとうまくいかないものです。だからこそ意識合わせすることが必要になる。

大磯プリンスで合宿をしたこともあります。そのときは未来の会社がどうなってるか絵に描かせた。どんな絵でもいいからと。みな最初は戸惑ってましたがそのうち思い思いに描いてましたね。大きな会社を描く人や、小ぢんまりした会社を描く人。みな将来に対して描くイメージが違っている。それを認識した上で、自由に意見を言い合い共通の理想的な会社像を作り上げていく。これで価値観を共有することができるわけです。

とくに私が人間工学で感心したのが適性、人間性、性格、直感などを数値化するノウハウです。たとえば入社を希望する人が、我社に適性があるか、価値観を共有できるか、試験を受けさせることですぐ分かるわけです。入社試験では人間工学に基づいたテストを必ず入れていました。

余談ですがこれは血液型に似ているんです。当時の社員はB型が多かった。B型は独創的である反面、扱いづらい面があり、また自己中心的な人が多いと言われています。私はA型ですから繊細で小心者で慎重派。だから社員を束ねるのには相当苦労しました。いずれにせよ、あのセミナーをきっかけに人を育てることの大切さを痛感したのです。

いま考えている人材養成はグローバル化ということです。探してもそういう人材はなかなかいません。また周りがグローバルでも自分がそうでなければうまくいきません。だからこそしゃかりきになって英語の勉強をしました。英語ができないとグローバルという言葉は使えないですし。

会社の成長に大きな力を貸していただいたのが、税理士の三浦先生でした。三十年近く見ていただきました。年は私と変わらないんですが残念ながら六年前に引退されました。

三浦先生には公私ともに本当にお世話になりました。当時私の自宅の近くに事務所があり、税務関係の相談によく行ってました。最初にお伺いしたときはお姉さんも含め社員三名の小さな事務所でしたね。当時は駆け出しだったようで十数社と担当する会社も少なかったのですが、最盛期には百社ぐらい見る大きな事務所になりました。

私の「動」に対して、三浦先生の「静」。よくストッパーになっていただきました。税務署の調査は四、五年に一回あるんですが、バブルの頃は私は節税にするのに相当頭を使ってました。

でも三浦先生に突っ込まれて、何回ももめましたね。「それは計上できない」と。

そのときは渋谷税務署の管轄でした。法人四課が担当なのですが、渋谷地区には社数が二万社近くあるのに調査官が百数十人ぐらいいなかったんですね。とにかくてんやわんやで減多に来ないんですけど、忘れた頃にやって来る。当時は法人税率が四十五%と高い税率でした。それをもし言われるがままに払っているとキャッシュフローがうまくいかなくなる。で、喧々諤々税務官とやり合うんですけど、三浦先生は表に出れるタイプじゃないんで、私と税務官の間で板挟みになるんですよ。先生はヒヤヒヤドキドキしてたと思います。

で、いずれにせよ確定しなきゃいけないわけで、呼び出しを受けて二人で行くわけです。こちらは節税したい、向こうは取りたい、というわけで駆け引きがある。そのやり方は最初は分からなかったんですけど、ヤンチャな私はさまざまな手法を思いついた。

たとえば税務署から呼び出しの時間を指定してくるんですが、それに応じないようにする。なるべく十時半から十一時に行くようにしました。向こうも人間なんで、昼になったらお腹が空くじゃないですか。こちらも昼越しでは忙しい、と言ってあるので、そうなるも駆け引きになる。こちらは譲らない、向こうは向こうの言い分があるんです。でもお腹が鳴るのでまあいいかと。粘りに粘って、半額以下にさせたこともありました。三浦先生はきよとんとしてましたね。

いずれにせよ「動」であり「ヤンチャ」である私をうまくコントロールしてくれた三浦先生には心から感謝しています。

欲というものについて

私の人生のテーマに「欲」ということがあります。これについてはバブルの頃非常に悩んだことがありますね。一回「出家」を考えた。それは三十七歳の頃だったかな。

世間とはとにかく金、金、金…。そうした状況の中で、欲の世界から無の世界に行ったらラクになるのかなと考えたんです。私の家は日蓮宗ですが、仏教の中では曹洞宗が一番シンプルでわかりやすい。ならば、とその総本山福井県の永平寺に見学に行った。

永平寺には修行僧がかなりいるんですが、その様子を近くで見ることができるんです。お寺は山の中にあって、そのときは冬でしたがあまり雪がなかったことを覚えています。

お寺に行く前の自分の心境はなぜか今でも覚えています。

「人間弱い面がある。欲が強いとそれを抑えることは非常に難しい。欲に潰されることだってある。ならばいつそのこと会社を辞めて仏門に入りたい」

——そう真剣に考えたわけです。でも結果的に仏門に入るのを辞めた理由も永平寺でした。

私が修行僧を見学して帰りの途についたとき、たまたま寺の前のATMが目についた。なんと中でお坊さんがお金を引き出しているのではないですか。で、思ったんです。

「永平寺でなぜ金がいるのか？」

お坊さんがなぜ金が必要なんだ？ 当時私は欲を断つということをしきりに考えていたわけで、僧侶はみなそうした理由で仏門を叩いていると思っていました。でも実態はちょっと違っていた。

それまで朝早く起きて、一汁一菜のごはんを頂き、一日中修行にあけくれる。そんな生活を送る出家はものすごく決断がいることだ、半端な気持ちではできないな、と思っていました。でもとにかく行ってみよう。本当に覚悟があるならできるな、と。でもATMのお坊さんを見て我に返り、出家を思い留まったわけです。見方を変えれば欲の世界との綱引きに負けたということかもしれない。

永平寺の帰りには温泉に行き湯治の宿に二、三泊しました。自殺の名所東尋坊も訪ねました。断崖絶壁で足がすくむ思いがしました。素直に怖いなと思いましたね。まだ欲の世界との決別を考えていた私は、一瞬、これだったら間違いなくあの世に行けるな、と思ったのですが…。そんな勇気はなかったですね。もし、あったとしても私はできないな、と。死を選ぶならもっと楽な方法で、と…。

昔から瀬戸内寂聴さんの本が好きで、講話などをよく読んでいます。あの人の素晴らしいところは人間らしく生きている、ということにつきますね。寂聴庵というのが京都と平泉にあるんですが、なんとそこにはバーがある。寂聴さんは精進料理じゃなきゃダメ、という主義ではなく、肉も食べるし、ごくごく普通の生活を送っています。講話も偉そうな教えはまったくなくて、毎

日の生活で気づいたことや感じたことを話している。もう九十二歳になられるんですがいまだにお元気ですね。それでもいつ死んでもいいように毎日を一生懸命生きると、そんな姿勢を貫かれています。

寂聴さんは二十一歳で見合い結婚し、翌年に女の子を出産します。しかし夫の教え子と恋に落ち、夫と子供を残し家を出て京都で生活する。ところが、その教え子とはすぐに破局。その後小説家を目指し同人誌の門を叩きますが、そこで出会った純文学の小説家と恋に落ちます。また、先の教え子と再会したのも関係が始まる。波乱万丈の人生です。そしてそんな関係に疲れ五十一歳で出家するわけです。

自分の経験から人の悩みに答えている、寂聴さんの言葉には説得力がありますね。彼女の今の生き方というのは私にとって理想というか、非常に羨ましいものを感じます。欲について考え、深く悩んだ自分にとって人生の指針になる。

私はよく「人間としての美学」ということを考えます。どうしたら人間の魅力を追求できるか、とか。でも欲を捨てるということは美学ではないと、そう思いましたね。

自分を見つめてみて一番の欲は「会社がうまく行くこと」だと気づきました。独立以来それしか考えていなかった。お金なんて二の次。自分で始めたことを全うする――、そういう気持ちが強かったようです。ダメになった会社をいくつも見てきているから自分は決して負け犬になりたくないと思った。小林家のDNAはみなそうなんですかね。非常に負けず嫌い。父は子供にも厳しかったが、同時に自分にも厳しかった。妹もその子供もみなそんな感じです。

これは余談ですが、妹も子供には非常に厳しく、甥は剣道で日本で一、二位を争うぐらいにまで育ちました。負けん気は人の何十倍。こんなところにも小林家の血を感じてしまいます。



全日本実業団剣道大会優勝後に、甥・植田桂介（写真左）と姪の旦那さん・勝見健太（写真右）と

バブル崩壊の煽りを受けて

一九九一年のバブル崩壊。私が四十歳のときでしたね。我社も例外なく大打撃を受けました。仕事は一気に激減、不動産など会社所有の資産も価値が暴落。他社はいち早くリストラを断行しましたが、私はなかなか人を切ることができなくてリストラに踏み切れませんでした。社員はみな仕事がないからオフィスで待機状態。何もすることがない。

温情派と言えば聞こえがいいですが、私がリストラを行わないことで会社がさらに傾き、逆にみんなを苦しめることになったのです。もしかしたら温情というものは経営にとって必要ないのかと悩んだこともありました。

それで半年ぐらい遅れて泣く泣くりストラに着手しました。人以外に三つの事務所を一つに減らしたりありとあらゆることをやった。社長の給料はもちろんゼロ。銀行から融資も受け、私の家も担保に入れ、処分できる財産はすべて処分しましたがそれでも足りなかった。あとはなんとか気持ちで耐え抜いた感じです。

独立当時は無借金経営を目指してましたけど、それは無理で結局バブルに浮かれ、いい思いをしたのは数年、そのあとは地獄を這いずり回ることになったのです。それでも毎日一円でも多く銀行返済しようがんばりました。そんな経験をしながらここまで会社を続けてこれたのは奇跡に近いですね。

バブル崩壊で人を切らねばならなくなったとき、私はうつ病になったんです。毎日が針のむしろで、結果的に精神のバランスを崩した。二年ぐらい病院に通っていました。

そこは大きな病院で、さまざまな心の病を持った人が通院していました。私の場合比較的症状が軽かったのですが、待合室には見るからに重症の人がいるんですね。暗くて、うつむきかげんで…。その人たちを見て「あっ、自分はそこまで行ってないな」と思ったんです。そこまで行かないようにがんばろう、とにかく前向きに歩いて行こう、と。

仲間にはバブル崩壊でおかしくなった人とか自殺した人とか多いです。でも、自分はそうならなかったのが本当に良かった。きっと社員、仲間に恵まれ、励まされてきたことが大きな勇気につながったんだと思います。



曼珠沙華。天上の花とされている

私を救ってくれたもの

私は二十五年間、毎週末欠かさずテニスを続けています。始めたのはちょうどバブル崩壊の直前の頃でした。テニスのおかげで今日まで一度も健康診断で引っかかったことがないのです。検査結果はすべてAかB評価で再検査は一度もありません。

ここまで続けてこれらたのには私の師匠の存在があります。それが増子義明というコーチです。増子さんは慶応大学の庭球部出身で、国体で神奈川県代表として優勝を経験。天皇陛下とも一緒にテニスをしたことがある、一流プレーヤーです。お歳がいま七十過ぎなんですが、毎週日曜日にはこの方に習っています。

テニスはそもそも人間関係がフラットで、学歴、年齢、性別といった差別は一切ない。実力がすべてです。そこではテニスのことだけ考えていればいい。でも私は私は負けん気が強いので、ついつい勝負根性が出てしまう。それでも上手い人には勝てないのは当然だからと、さらに上達しようとはがんばります。

最近ではダブルスでしばしば試合に出るようになりました。一、二回戦までは行くのですが、相当年季の入っている人も出てくるので勝てず、悔しい思いを何度もしています。それで技術を高めようと増子さんに少しずつ教えてもらっています。ひとつマスターするのに一年はかかります。サーブ、フォアハンド、バックハンド。一段階レベルを上げるのに最低一年はかかる。テニスは体で覚えるもので反復練習が大事です。そしてやめたら技術は落ちていくだけ。なので土日は最優先で三時からみっちり練習をやっています。

私が初めてテニスと出会ったのはゴルフ練習場でした。当時その隣にテニススクールがあり通っていたのですが、ある知人から「たまにはテニスでもやってみませんか」と誘われて。初級から入ったんですが、その奥深さにすっかり惹かれてしまいました。当時「なんでもいいから一つ極めたいな」という気持ちがあって、それものめり込む原因のひとつだったんです。

最初のうちはゴルフもやっていたんですが、両方やっているとどっちも下手になるからテニスに専念した。だからいまでも趣味は増やさないようにしているんです。

現在クラス的には上の方にはいるんですが、師匠の教えは厳しかったですね。あまり褒められたことがない。でも上手くもないのにお世辞を言われるよりはずっといい。そもそも増子さんはコーチングを勉強したわけではないので、教え方がうまいという人ではない。特にフォア・バックハンド共に、基本を重視した教え方をします。

最近では鎌倉から日吉まで車で週二回来てくれています。師匠とは個人的にも家族ぐるみの付き合いが続いています。よく鎌倉のご自宅に伺うのですが、それ以外でも、師匠が岡山に行った時は妹に面倒を見させて、後樂園とか岡山城とか案内させました。師匠の奥様はピアニストであり、團伊玖磨さんのお弟子さんです。いまでもリサイタルとかなさっていて、私も自宅でピアノの演奏を聴かせてもらったりしています。

年一回増子さんを囲んでの忘年会があるんですが、このときはお弟子さんが多勢集まります。非常に人望のある方です。

師匠の教えは「続けること」「継続は力なり」です。これは私の哲学と同じなんですね。増子さんは自分の思ったことを主張する人。決して妥協しない人。星飛雄馬のお父さんより厳しい人。

最近では師匠もだいぶ丸くなり、お坊さんになる学校に行くことを考えているらしいです。私は増子さんには「いまのままのほうがいいです」って言いましたが。

テニスが続けた二十五年。バブル崩壊でもストレスにやられたり、酒に溺れて体を壊してダメになるようなことがなかった。ノイローゼにもならなかった。それはテニスに、そして師匠出会えたからだと非常に感謝しています。今回私の半生を本にするので、と寄稿をお願いしたら快諾していただきました。それは後半部でご紹介させていただきます。

そしてもうひとつの「継続」が浅草寺参り。

私は毎月八がつく日に必ずお参りしています。修行したいというわけではないんですが、気持ちを整理するため、無になるため行っています。お寺ではお坊さんに合わせて観音経と般若心経を三十分ほど読経する。そして寄進して毎月お札をもらう。とくに三月十八日は観音様のお誕生日で、札がちよっと違い、赤いお札をもらえる。また、四月にはお釈迦様の誕生日、七月には「四万六千日」があり、このときは必ず参拝するようにしています。

浅草寺では毎月「功德日（くどくび）」が月に一日設けられており、その日に参拝すると、百日分、千日分の参拝に相当するご利益（功德）が得られると信仰されているのですが、七月十日の功德のご利益は、四万六千日分（約百二十六年分）に相当するといわれています。

そうして毎月お札をもらい会社の神棚に収め、毎朝神棚に榊と水を変えて、お供えをする。十二月の最後の八の日の時にはお札を十二枚持ってお返しに行く。これを二十五年続けています。私にとって浅草寺に行くのは「継続」であり、また「修行」なんです。

正直結構きついときもある。体調が悪い日もあるわけですが、そこは心を鬼にして「決めたことは必ずやる」と。それが継続であり、信念だから。人間辛いことはイヤだから、やめたいわけじゃないですか。でもこういうことは誰のためにやるわけではない、自分のためなんです。自分の気持ちに負けてしまっただけは会社もやっていけない。

私は会社も休まず行っています。これも「継続」ですね。ふつうはどんな人でも病気になるじゃないですか。幸いにも風邪も年に一回ひくかひかないかで、入院したこともありません。お酒を飲んで、階段で転んで、肋骨を三本くらい折ったとき、痛いんだけどどうしても会社を休めないんで、お医者さんに診てもらったら、「とりあえず入院しなさい」って言われて。それを断ってコルセットを巻いて、内緒で入社したこともあります。

「継続」という意味では、弊社には神棚があり、毎朝入社したら、すぐ水と榊を取り替え、二拝二拍手一拝を行います。また月初には必ず神棚の酒、米、塩、水を取り替えます。これを三十数年続けています。会社にとっても大事なことだと思います。御札には商売繁盛って書いてあるのですが、会社を後押ししてくれている神様に感謝の気持ちを持って続けています。

ただ「運」ということはあまり意識していませんね。自分が運がいいとか悪いとか考えない。運

だめしもしません。開運、厄除け、おみくじ等はいっさいやらない。

以前はどうしても迷ったときに相談する人はいました。お金を払って占ってもらったりね。それは大きな決断をしなければいけなかったときです。でも結局道は自分で切り開いていくしかない、そう思うようになりました。世の中、絶対というのはない。自分が来た道は間違っただ道じゃなかったかもしれないし、間違っていたかもしれない。会社が上場にまでまだ至ってないことを考えれば、反省すべきところがいっぱいある。でもそんなこと考えてもしょうがないんです。やっぱり人間「器量」というものもあるでしょうし。

それよりも人間力というものが大事です。人をうまく使える人は商売の流れに乗っていけるし、人間が小さければ小さいことしかできない。そこに力量が試される。まだ会社が大化けしてないという意味では、私もまだまだだと反省するところもある。でも、あのとき日立行ってよかったのか、独立してよかったか、大事な時の決断はよかったか、私は振り返ることはあまりしないようにしています。正解も不正解もない——それが人生だと思います。またそう思わないと会社は前に進めないもの。つねに前向きに、後ろに下がることは経営者はしていけないことだと思いますね。



毎月八が付く日に参拝する浅草寺

子供達について

振り返って見ると、自分が本当に経営者に向けてたか向いてないかわからないですね。経営は金、人、モノ、何か必ず問題が起こる。それを解決するためにエネルギーがツネにいないじゃないですか。体力がいるし。休むなんてとんでもない話です。でもやはり心の切り替えが必要になってきます。そうしないと自分に負けてしまう。私はテニスに出会ったから切り替えができるようになりました。

それでも子供たちに対しては本当に申し訳ないという気持ちでいっぱいです。仕事のために犠牲にしてしまったことが多々ありました。平日は帰りが遅く、土日はテニスで家を空ける。子供たちも半ば諦めていましたね。それでも学校の参観日とか、三者面談とかは必ず行くようにはしてましたが…。

ここで私の息子について触れておきましょう。息子には私の思いを押し付けたため、逆に辛い人生を歩ませたという思いがあります。

私は親の方針「勉強よりは家の手伝いを優先」のため満足な教育を受けられなかった。だからこそ自分の子供には十分な教育を受けさせたかったんです。とにかく最終的には大学行って欲しいと。

本人はあまり勉強が好きではなかったのですが、小学校から家庭教師をつけて塾にも行かせ、とにかく英才教育をしました。家庭教師は慶応大学の大学院の学生を紹介してもらい、塾も有名な所を選びました。でもそれほど効果が上がらなかった。塾でも成績は下位の方でしたね。これは本人にとってかなり酷なことをしたと思いました。息子が望まぬことを無理矢理押し付けたわけですから。

中学校入学も受験をやらせたんです。私立を四、五校受けさせて、そのうち二校に受かりました。そして最終的に選んだのが立正中学だった。ここは立正大学の付属校で、仏教科は日蓮宗のお坊さんが入るところです。私の家も日蓮宗で、自分自身物心ついたころ「お坊さんになりたい」という気持ちがありました。息子の場合は、まあ、ここに入れておけばグレることもないだろうと。お坊さんにするつもりもなかったので普通科に入れました。

でも、順風満帆に行っていると思いきや、息子はイジメに会っていたんです。運動会に行っても分かりました。どこを探しても息子がいない。じつはパシリにされていたんです。ショックでしたね…。とんでもないところに入れたな、と。

それでもなんとか息子は中学を出て、一貫教育の高校に進み、大学を目指していました。立正大学の哲学科。ここは非常に有名なところで、私も是非入って欲しいと願っていたんです。でも三年生の八月、担任から自宅に電話あって、「哲学科は推薦枠が二名なのですが、息子さんの場合出席数が足りなくて推薦できません」と告げられました。

そこで息子にハッパをかけて「とにかく大学に入れ」と猛勉強させた。本人も一生懸命やって、なんとか神奈川大学の経済学部合格しました。ところがしばらくしてあまり学校に行かなくなってしまったんです。というのも経済学部は藤沢で、なにしろ自宅から遠かったのです。そのう

ち学校には行かずバイトに明け暮れるようになってしまいました。

このまま行くと卒業できないのではないか――。そう思っていた矢先、四年生の五月でしたかね、突然息子が「学校やめてきました」と告白したんです。

怒り心頭に発しました。「どういうことだ」と。聞けば自分がやりたい学問、学部じゃなかった、と。こちらにも教育を押し付けたという負い目があるので、渋々認めることにしました。

それからは息子は家に居候しながら、秋葉原の会社でバイト生活を送っていました。そこは給料も相当良かったみたいです。でもしばらくしてそこも辞めて、家にこもるようになってしまった。

私は「これは本人のためによくないな、ぜひ社会勉強をやらせたい」と思い、兄のところに行くことを勧めたんです。以前から本人は兄と気が合うらしく、自分のお金で渡米しアトランタの家に三か月ぐらい居候してました。そのうちお金が尽きて、なんとか持ってきてくれないかという連絡があった。

当時アトランタに行くのは非常に大変だったので、ラスベガスで落ち合うことになりました。「そこならお金を増やして渡せるぞ」なんて言ってね（笑）。現地では久々に二人の時間を持てましたね。ギャンブルをやったりグランドキャニオンに行ったり。息子は語学は得意な方ではなかったのですが、滞在中必死で勉強したらしく、航空券の予約やらホテルの手配やらなんでも一人でできるようになってました。人間いざとなるとなんとかなるんだなと感心しましたね。どこでも生きていけるんだなと。

その後兄の生き方に影響され、将来はアメリカで暮らしたいという希望を持っているみたいです。兄も息子を気にかけてくれています。性格も私より兄に似ているのかな。

いまは日本のIT会社に勤務しています。私としては自分の会社を継いで欲しかったのですが、無理に押し付けるのはやめて息子の意思を尊重しようと思っています。いま三十三歳ですがこれからの人生、とにかく長いですし。

一方娘のほうですが、しばらく会社を手伝ってもらっていたのですが、三十二で結婚しました。旦那さんは十歳上の優しい方でね。子供ができ、しばらくして退社したんです。いまはカウンセリングの資格を目指し猛勉強中です。頑張り屋の性格なんですね。

二人にはこれから幸せな人生を送って欲しいと心から願っています。



孫の優輝の三歳時の一枚。活発で聡明な子

いかにして人を大事にしていくべきか

システムシンの所在地、東京・渋谷にもITバブルが起こったことがあります。一時期「渋谷ビットバレー」と言われて、それに併せどんどんマンションができてミニバブルの様相を呈していた。しかしながら我社には恩恵はなかったですね。というのも我社はベンチャー的な仕事はしておらず、もっと堅いシステム開発がメインの業務だったからです。いや、新しいモノを作る、そういう能力もなかったのかもしれませんが。まあその勉強のために何度もアメリカに行ったわけですけど。

会社もバブル崩壊以降いつとんでもおかしくない状態だったんですが、歯を食いしばって細々とやりくりしながらなんとかやってきました。国から助成金をもらったり、銀行には借金を猶予してもらったりしながら。なにしろずっしりと重い借金をしてましたので、そう簡単に上昇できるはずがない。しばらく銀行の借金を返すために事業やっているような感じでしたから、なかなか利益も出ませんでしたね。といっても銀行も回収できなかつたら不良債権になってしまうため、いろいろ協力・応援してくれましたが…。私も必死にまじめに仕事していたので銀行も分かってくれたんですね。

ここ十数年は銀行からの借入れもいっさいありません。負債もだいぶ減りました。新規事業計画も作っており経営状態も上向きです。ここまで来れたのは銀行やお客様、社員、その他さまざまな人々のおかげだと実感しています。本当に感謝しています。

こうしてようやく順調に回り始めた昨今ですが、それでも経営者にはつねに資金繰りがついて回り安眠できる日はありません。遊びも本気でのめり込めない。どこにいても脳の半分は仕事のことを考えているからです。もしも私が遊びに現を抜かしていたら、いまの会社はなかったでしょうね。それはこれからも同じです。

現在我社は社員は三十名近く、さらに契約社員を入れて総勢四十名近くになります。私は業界四十八年目ですがIT業界はスピードが勝負。私が最前線というのは無理がある。だからなるべく若手と話して、いま若者が何考えてるのか？ これからのトレンドは？ と日夜勉強に励んでいる毎日です。

最近の悩みは「いかに社員を大事にするか」ということです。人材の大切さを改めて実感しているのです。というのも今の「会社」というのは、昔の会社とはちょっと変わってきているからなんです。日本は終身雇用が崩壊しつつあるし人材の流動化も激しくなってきている。とくにIT関係はそれが顕著です。

みな趣味があまりなく、人とのつながりを築けない。車を買いたいとか、あれが欲しいとか共通項も少ない。会社の中でも横のつながりができにくくなっています。それは個人対会社の関係性でも同じです。結局はお金のつながりになってしまう。そうなる「金の切れ目が縁の切れ目」、人材をつなぎとめるためには儲ける以外ないということになる。

でも景気というのは波があるわけだから、給料だって上下します。良い時は良い、悪い時は悪い

では人は会社に残らなくなる。だから給料を上げるのは簡単でも下げるのが非常に難しいんですね。それを人情でやると会社がおかしくなってしまう。

最近の若い人はどんなに気を使っても会社をすぐ辞めてしまいますね。とくに新人は三年持ちません。まず我社にいる理由を探す、次にもっといい所を探す、非常に考え方がドライで、せっかく育て上げて一人前になったときに退職してしまいます。

もっと人をうまく引き上げて、モチベーションを高く持たせ、夢や希望を抱かせるようにしなければ人は居着かないのですがそれが非常に難しい。

私は信頼していた部下が辞めるというときには、夜な夜な深酒をしてしまいます。誰にも相談しようがないし、第一私の所に話が回ってきたときには100%辞めることが決まっています。留意なんてできないんですよ。戦友っていうか、友達をなくしていくようなものですからね。

やはり「人を育てる」ということが経営の中で一番重要なのですが、これが正しいという明確な答えはないんです。いまはひたすら営利を追求して、社員のためにできるだけ還元していくしかない。それを言葉ではなくて金額で示さなければいけない現実があるんです。

三年前から、テニス以外にジムに毎週通うようになりました。ひとつは体のため、お酒を抜くため。私は金土日は完全にお酒を断つようにしています。そうでないと僕ぐらいの歳では体を壊してしまいますから。とにかくメリハリ、スイッチのON・OFFが大事。それがないとだいたいくたばってしまいますからね。同業の社長で成人病にかかり生命を失くした人を多く見てきています。

最近では自分の生活を変えることなく気楽に暮らしています。平日は仕事に没頭し、土日はテニスをし、たまに競馬に興じる。今後どうやって暮らすか考えますが、定年がない、しかもブレーキかける人もいないということで、つねに自分を戒めることの重要性を痛感しています。

悪いことをすればこだまのように自分に返ってくる。もちろん大きく道を外すことはありませんが、社長業を長く続けていると普通のサラリーマンとは感覚がずれてくる。謙虚さが薄れてくるのです。どうしても上から目線で見えるようになる。それは大きく戒めなければいけない点ですね。



横浜市のテニス大会で。仲間たちと

バングラデシュで感じたこと

私の会社も新規事業も起こさねばならず、今いろいろとビジネスのアイデアを探しています。それで世界中を飛び回っているのですが、最近行ったバングラデシュは衝撃的でした。そこは最貧民国でして、私も貧乏でしたから貧しい生活がどんなものかわかっているつもりでしたが、現実はそのをはるかに超えていました。

とにかく衣食住すべてが足りてない。向こうは水を飲むのも精一杯なんです。酸化ヒ素が入っていて毒気が強いので、井戸水は煮沸して洗濯。飲み水は市販のものを買います。ペットボトルは500mlで十円ぐらいです。

いま日立や東レ、クラレといった企業がアフリカで大規模な水のプロジェクトを進めています。ただしそれはODAやJICAとセットで取りはぐれがないようにしている。それだけリスクも大きいということです。その代わり一発当てれば大きい。また中東のサウジアラビアやUAEでは日本が海水を真水に変えるプラントを作っている。これはだいたい五億から十億かかるんです。でもバングラデシュは最貧民国なんで日本もほとんど援助しない。ビジネスも起こらない。現地の人たちの生活はまったく向上しないわけです。

ならば、と私は水のビジネスを考えたことあるんです。しかしどう考えても、ペットボトル日本で百円するものを十円で作るというのは難しいんですよ。そういう意味ではパキスタンやインドも同じ状況で水で苦労してますね。この前バングラデシュへの経済進出のセミナーがあったので出席しました。出席者と名刺交換したら、伊藤園の海外事業部の偉い人でしたね。向こうで水やお茶を売りたいと。でも採算が合わないのでまだ進出できないと言っていました。

また日本には「酸化ヒ素を濾過して飲めるようにする技術」があるので、その工場の見学に大阪まで行ったことがある。バングラデシュの水は濾過できるか尋ねたら「水を持ってきたら実験します」と。ただ水は飛行機では運べないんですよ。機内に持ち込めませんから。それで水のビジネスは一旦諦め保留にしています。

ただここには何かしら必ずビジネスチャンスがあると思いましたね。たとえば労働力はものすごく豊富なわけです。六億ぐらい人口がいる。人だらけです。現地では給料が月五千円程度。その安い労働力を使ってなんかやろうとしている会社は沢山あります。たとえば紳士服。裁縫が多いんですけど、ミシンを使ってTシャツを作るとか。ものすごく安い労働力を使ってやっている。

また革製品の製造も盛んです。現地には水牛が沢山いて、それが雨季に溺れて死んでしまう。その皮を鞣すわけ。もちろん技術力がないとできない。チッタゴンというバングラで一番大きい港町があるんですが、その周りの経済特区には多くの外国企業が進出しています。面白いのが日本で売っている革靴で「メイドインチャイナ」と書いてあるものは、ほとんど製造はこちらなんです。つまり中国が再々委託みたいになっている。靴下も同様にバングラなら十円、二十円で作れてしまいます。

私は滞在中にそういった工場を何軒も回って値段交渉をしてきました。価格やどの程度の品質のものなのか実際に観て歩いた。そこで意外だったのはミシンとか自動織機ですね、その中古品

のニーズがいくらでもあるということです。それで日本に帰ってきて古物商の免許を取得しました。いま輸出の方法をいろいろ勉強しています。

情報のアンテナなんてみんな持っているんでしょうけど、要は立てるか立てないかの違いだと思うんです。ふつうみなイヤでしょう、バングラデシュなんていきたくない。酒も売ってないし、飲み屋もない。でもそういう観光の発想で行ってる人間の行動はワンパターンになってしまう。ふつう人が経験できないことをやるのが、新しいアイデアを得る刺激になると思います。バングラデシュは最貧民国ですが、日本はそういう意味では満足というか、欲しいモノが見つからない。向こうは何でも欲しい社会。真逆なわけです。

私は海外に遊びでは行かないんです。余裕があるわけではないし、何か日本にはないものを見つけてくる。会社の経費を使うので土産がないといけない。

いま、私が一番注目しているのがミャンマです。まだ行ったことはないんですが、上下水道や通信網、道路などいわゆるインフラの分野ですね。その整備が盛んです。どの企業も注目してるし、国もかなり投資をしようとしてるんじゃないでしょうか。これは勝機なんですよ、でも商社とか大きな会社じゃないとなかなか参入できない部分もありますが。

海外を旅行して知人が増えると、意外な依頼を受けることがあります。一度パキスタンの知り合いから「日本からコピー機を輸入したい。その中古を集めて欲しい」と頼まれたことがあります。これは本当に勉強になりました。調べて見ると、じつはコピー機はパキスタンへの輸出が規制されていたんです。パキスタンは過激なイスラム系であり、原発を持っているので、武器に転用できる商品については規制が厳しい。コピー機には感光ドラムという部品が入っていますが、これは改造すると武器に使えるらしい。このときは丁重にお断りしました。

またモンゴルの知人からは「中古のタイヤを買いたい」と依頼があった。それで驚いたのが積み込み方。タイヤを輸出する場合ただ積みばいいというわけではなかったのです。四トントラックに大きいタイヤ、中ぐらい、小さいもの、と輪の中に順に詰め込んで運ぶわけです。ふつうでは二百個ぐらいしか積みないところを三倍ぐらいにして送らせる。こういうのはビジネスをやるまでわからないことです。

ただ貿易はルートが大切です。そこに気を付けないとみすみすお金を撮り損ねてしまう。リスクは常にあるんです。

ビジネスっていうのは、絵に描いた餅ではいけません。どんなニーズがあるのか、どんな展開ができるのか、そのヒントは身近にある。どういう人と付き合っ、どういう情報を手に入れるかが鍵になるわけです。

これからも世界中を駆け回って、ビジネスのネタを探し歩きたいと思っています。



バングデシュで知り合った友人たちと

「転がる石に苔はつかない」の気持ちで

先日岡山の実家に帰ってきました。じつは棚田のある私の故郷に産業廃棄物の処理場ができるというのです。

計画では処理場の周りに桜を何本も植え、春にはそれが満開になる美しいふるさと作りをするということでした。でもどう考えてもそうはならない。たぶん辺りはいたるところにゴミの山ができ、環境が破壊されることでしょう。

私が帰省したのはその話し合いのためでした。聞けば村落のほとんどの家が売買契約書にハンコを押し、残っているのは私の家ぐらいだそうです。どうやら私が絶対反対することを分かっている、私抜きで極秘裡に交渉が進められていたようなのです。そのやり口の汚さに怒りを覚えました。

結局私はハンコを押さず、交渉は決裂し東京に戻ってきました。今後も認めるつもりは全くありません。

「ふるさとは遠くにありて思うもの」という言葉がありますが、自分にとってはそうじゃない。幼い頃に育った美しい風景が、いままさに壊されようとしているのです。それを止めるために全力を尽くさなければならない。私は目が黒いうちは、いやそうでなくなったとしても戦い続けるつもりです。たった一人でも。

思えば東京に出て来て三十七年、いろいろなことがありました。楽しい思い出も沢山ありますが、私にとっては常に戦いの連続だったような気がします。会社員時代は学歴の低さをカバーするために必死で仕事をして、それでもうまく行かず、独立し、小さなボートで大海に出た。それから同業他社との戦い、バブル崩壊との戦いと一時も心が休まることはありませんでした。

でもそれでいいと、私は思っています。「転がる石に苔はつかない」。私もそうありたいものだと思っています。

これからも頑固だと言われようが、つねに「前進」あるのみ。戦う姿勢を持ち続け、また少しずつでもいいから、いままでお世話になった人達にお返しをしたい。

いま、そんな気持ちでいっぱいです。

小林謙二様へ

日吉テニス

スクール 増子義明

私は学生時代、鎌倉「ローンテニスクラブ」で、熊谷一弥氏（オリンピック単複銀メダリスト）、柏尾誠一郎氏（オリンピック複銀メダリスト）、山岸二郎氏（世界ランキング七位）、その他多くの元デ杯選手達にテニスを教えて戴きました。当時は今日と違いテニススクールなどまったく無い時代でしたから、こうした大先輩から教えられながらテニスの技術を磨きました。ですからクラブには全日本やインカレ、関東学生等のチャンピオンが多勢居りましたが、かつて自分達も大先輩達に教えられ上達したことから、子供達や初心者にも心良く相手をしてくれます。

私も大先輩達に感謝の気持と多少の恩返しの気持でクラブのジュニア達を指導したりして居りましたが、縁あって日吉テニススクールのコーチを務める様になり、そこで小林謙二氏と小林慶二氏の二人の小林氏に出会い、以降二十数年間親しくお付き合いさせて戴いて居ります。我々はお二人を謙二さん慶二さんと親しみを込めて呼んで居ります。謙二さんはバリバリのラガーマンで慶二さんは温厚な最長老。二人は正反対ながらクラブの良き纏め役で大変感謝して居ります。

謙二さんと初めて出合った時の印象は、ラガーマン剥き出しのファイトの固りのテニスで、私は、謙二さんにはテニスは向いているスポーツだと直感致しました。私は大学のラグビー部で活躍しながら卒業後はラグビーをする場が無くなりテニスクラブに入会して来た方を何人も指導して来ましたが、彼等は基礎体力や運動神経に恵まれた方ばかりですから普通の方より大変進歩が早いのです。そこで私は謙二さんに「テニスは身体は触れ合わないがボールを介した格闘技です」と申し上げた記憶がございます。そして「テニスは生涯スポーツとして最適なスポーツだと思います」と…。それ以来謙二さんは毎日曜日ほとんどレッスンを休むことなく全くラグビーと同様全力でテニスに打ち込んで居ります。

テニスは先に攻撃した方が断然有利なスポーツですが、未熟なうちは攻撃することによりミスが生じてしまい負けることが多いのです。ですから初・中級者は守りのテニスになってしまいなかなか大成しないのです。しかし謙二さんは正にラガー魂そのままに攻撃し続けます。攻撃することにより技術の良し悪しが解りそれで上達するし、テニスの面白さ、奥深さが解り生涯続けても飽きないスポーツなのです。

又ゴルフはコースさえあれば一人でもプレー出来ますがテニスは相手が必要です。試合は一对一で戦いますが、練習するには相手が必要ですし、お互いに切磋琢磨しながら上達していくスポーツでもあり、非常に仲間を大切にするスポーツなのです。ですから日吉テニススクールでも年に二～三回鎌倉に集まりテニスを楽しんだ後は手巻き寿司パーティを楽しんだり、日吉で毎年忘年会をして下さったりして居りますが、その纏め役をして下さるのが二人の小林さんなのです。これが二十数年間続いて居り、これはお二人の人徳の何ものでもありません。この会が生涯続くことを願いつつ他にも書きたいことが沢山ありますが、長くなり過ぎましたのでこの辺でペンを

置くことに致します。

小林謙二社長との出会い

弁護士 栃木敏明

この度、小林社長が「半生記」「自叙伝」なるものを著したいので一文を寄せてほしいとの依頼があった。お断りすることも考えたが、おめでたい話だし、電子本で、販売目的ではないとのことであるので、僭越ながら、駄文を寄せることにした。

私が弁護士登録して八年目、当時は新橋で独立開業していた頃であった一九九〇年、私の母校中央大学栃木県人会の後輩の畑孝樹君から「現在勤務している株式会社システムシンクで法律問題が発生したので、一度相談したい、社長を連れていくので相談に乗ってほしい」との電話があった。畑君とも久しぶりの再会であった。詳しい相談内容はすでに忘却の彼方であるが、訴訟には至らずに解決した記憶がある。

当時は、結構時間的余裕があったのだろう。相談を終えると、新橋の飲み屋街で安酒を酌み交わしながら相談の延長戦にはいり、やがて酔いも佳境に入ると、家族のことや、人生論や趣味などを語りながら夜長を過ごすのが恒例となっていた。

小林社長は、岡山の田舎から出てきて、日立グループの会社に入社し、一念発起会社を退職して今の会社を興したとのことである。年齢は、私の一個上。いわゆる団塊の世代で、子供の頃から激的な競争を闘って勝ち抜いてきた人である。第一印象は、トラブルを抱えているのでそう見えたのかもしれないが、暗く辛そうな感じで「こんなことがまかり通るようでは社会に正義はない」などと時折、怒りを爆発させていたこともあった（普段は奥底に密閉されている記憶がなぜか蘇ってきた）。

一本気の性格でやや短気。誠実で、不正を憎む正義感溢れた人。多少不器用で世渡りはあまり上手とは言えない。情に熱く涙もろい。これが私の小林社長に対する印象であった。

事件が一段落したとき、小林社長から「会社をやっていると法律問題の遭遇するときもあるので顧問弁護士としてお願いしたい」との申し出があり、社長とは長くお付き合いできそうであったので快くお受けすることにした。

顧問契約は、最初の案件以外に特別な相談がなかった関係上数年で終了となった。その後は年に一、二回はお会いする程度のお付き合いとなったが、今日に至るまで、なんとなく交友関係が継続している。

聞けば、独立系のコンピュータの会社を立ち上げて一九九七年十二月、創業三十周年を迎え今年で三十八年目という。小林社長と知り合った当時私は十社ほどの顧問会社があったが、バブル崩壊、リーマンショックなどの経済危機を乗り越えられず、現在はほとんど消滅している。会社経営はそれだけ厳しいということだ。これを考えた時、三十八年という長きに亘って安定的に会社を運営してきた小林社長を褒め称えないわけにはいかない。誠実、堅実な経営、パートナー企

業を大事にする経営理念を実践してきた証といえよう。

小林社長は現在六十五歳。好きな言葉ではないが、「前期高齢者」と言われる無理がきかない年齢である。

しかし、知力・体力の続く限り会社を運営し、コンピュータを通して社会貢献を続けていってほしいと願っているのは私一人でないと思う。

そして、最後に、私とも、細々で結構ですから末永くお付き合いした戴くことを切望して筆をおくことにする。

人生において得難い友

(株)ズィットワン代表取締役社長 水谷時雄

友人には三種ある。幼馴染、学友、それに社会人となってからの友人である。お互いに人との接触の仕方を持ち、知人となりつつある相手方を見分ける力を持っている。そういう中で、三十年間近くお付き合いをしてきた。知人というより友人である。

嬉しきはともに分け、苦しみもともに思う。一緒に海外旅行も、心置けないなかで、子犬のようにジャレ楽しむ。

最近、台湾にビジネス旅行をともにできた。事前にFaceBookで知り合いのかたに、ホテルまでお迎えいただき、台湾の北端、幽玄な温泉、自然保護のため道中は、住民しか自家用車では入られない地域で、古い温泉にご案内された。途中は大雨を通過し、濃霧のあとに山奥の湯治温泉がご自宅だそう。また翌日は、ビジネスのお付き合いの社長の実家に案内され、台中市から、日月潭の奥に鹿谷（ルーク）という農村、ご近所の組合長のご案内で、ロイヤルハニーの原汁を、ビール瓶一本ほどでお安く買い求めた。その農家でも一年で一本しか採れないほどの珍品、町まで一時間ほどで宴席が用意されていた。

すべて、事前の準備なく、偶然のように、海外の地元の方々の親切に出会う。我々はなんと幸せものだと、二人で勝手に思うのです。

そして、ビジネスで訪問企業は別々にお互いが走り、夜になると、お互いの部屋で、近くのコンビニで買い集めたものをベッドのうえに広げ、二人で人生を、業界を語り合うなかである。

月に一回、交互に事務所を訪問しビジネスランチを取り身近な仕事も交換、助け・助けられるこんな、友達は得難い。

前向きでアグレッシブで、そして温かく

籌能晴

小林さん、長いお付き合いをどうもありがとうございます。私と小林さんとの出会いは丁度三十一年前になるかと思います。

一九八三年三月にリコーでG200システムの商品化を目的にしたプロジェクトチーム（RIP T）が発足し、他部門にいた私が担当することになりスタートしました。

多くの技術課題を抱えたネットワークシステムの短期間での目標達成の為に、急遽ソフトウェア開発者の中途採用、また何社かのソフトウェア開発会社の協力を得て体制強化を図りました。以前から協力頂いていた一社が小林謙二社長の㈱システムシンクでした。

G200ネットワークシステムを中心になるワークステーションのキー技術の開発をお願いし、時代を先取りしたハードルの高い仕様達成へ向けて、苦難のスタートとなりました。

なかなか仕事がうまくいかず、なんとなくギクシャクしていた時、小林さんから野球対抗戦の提案があり、草野球チームの選手が何人かいる我々もふたつ返事でOKしました。

リコー・砧グラウンドにおける、初夏の太陽の下での実力伯仲の草野球と、その後のビールで盛り上がりました。談笑の中でテニス、ゴルフ、麻雀と共通の趣味の話題で意気投合し、今に至る幅広い付き合いのきっかけとなりました。

また仕事の面でも、両者メンバー間のコミュニケーションが非常に良くなり、課題への取り組みに弾みがついてきました。遊びの面ではお酒、麻雀がセットになった泊まりがけのゴルフで昼夜とも小林さんの勝負強さに鍛えられました。

ある仕事の節目の時に、両チーム対抗の麻雀大会を渋谷の旅館を借り切って実施してもらったことや、伊東温泉での社員の慰安旅行に声をかけてもらい、若い元気の良い社員と一緒に宴会、夜半過ぎまでの麻雀大会、翌日は早朝からのゴルフコンペと、いつもながらの小林さんの社員に対する温かい気配りを感じておりました。

小林さんとはたまにふたりで飲みに行くようにもなり、居酒屋でお互いの仕事の話、人生観、身の上話など夜遅くまで語り合うこともありました。

この前も久しぶりに二人で飲みましたが、渋谷の会社のことだけでなく、地方の地場産業への関わりとか、海外に目を向けての活動とか相変わらずアグレッシブで前向きな活動意識に感嘆させられました。

仕事の直接の関わりが無くなってから二十年程になりますが、いままでの長いお付き合いの中で他のメンバーへのお気遣いに、ずっと感謝しております。

今回改めて㈱システムシンクの経営理念を拝見しましたが、とくに社訓の五項目が、小林さんの仕事、人生の考え方、行動の全ての規範になっていると感じております。今後とも益々のご活躍を期待しております。

兄と過ごした日々

植田悦子

私は三人兄妹の末っ子として生まれました。一番上の兄とは五才、真ん中の兄とは三才違いです。家は貧しく自給自足の生活の中私達は育ちました。すぐ上の兄とは年齢も近くよく喧嘩をしました。小学生になった頃は学校の勉強より家の手伝いが一番、子供とはいえ我が家にとっては大切な戦力です。山に行っては松葉拾い木々集め、家の裏にある井戸からの水汲みが、兄妹のあたえられた仕事です。

この時代、当り前の日々の中で辛い事の方が多かったと思います。とくに兄達は大変だったのではないのでしょうか。おやつも買えなくて夏にはスイカ、秋の終りは物干しに掛けているつるし柿が唯一待ち遠しい季節でした。その中でつるし柿を両親にわからない様にするのは兄でした。それを目撃をした私にも少しだけ分けてくれましたが、いま思えば口止めだったのでしょうか。やんちやの兄は、近所の手下である男の子を誤って怪我をさせてしまい、父が大激怒の末、押し入れに長時間閉じ込められました。大泣きする兄を見て父に許してもらおう様頼み、一緒に泣いた覚えがあります。一番上の兄は性格もおとなしく、すぐ上の兄はやんちゃで一番両親を困らせたと思います。

いまでも忘れられない事があります。当時一番の上の兄が夜間の高校に行きながらアルバイトをしたお金で食パンとマーガリンを買って来てくれました。この時代とても貴重な食べ物で三人で七輪を囲み兄達が焼いてくれて、いざ食べれると思ったらすぐ上の兄が取り上げて私には一枚もくれませんでした。意地悪な兄にとっても悲しく悔しい思いをしました。

その兄も高校卒業後は県外に就職、百姓をしたくない思いと貧しい家から脱出をしたい気持だったのでしょう。就職して時々実家に帰って来てくれましたがその当時の記憶は余りありません。私も社会人となり、お互いに家族を持ちそれぞれの生活を営むようになりしました。

年齢を重ねた頃、十六年前に父がバイク事故を起こし頸椎損傷で重症、可半身不随の身体になってしまいました。入院生活中は近くにいる私が世話をしていましたが、心身共に落ち込む私を助けてくれたのがすぐ上の兄でした。電話は毎日の様に掛けてくれ、私の気持を楽にしてくれました。愚痴ばかりの私に、兄の言葉はどんなに励まされた事でしょう。

幼い頃、喧嘩ばかりしていた兄が今では私の心の支えになってくれ、父の事があって、お互いに苦しみを分かちあってくれる兄妹になった様に思います。いまは優しく見守ってくれる兄が大好きです。兄も若い時に会社を設立。人には言えない苦勞も沢山あったでしょう。幼い頃、やんちやな兄、負けず嫌いの兄、貧しい家に生まれ育った時代が今での基盤として頑張れるのだと思います。私達家族は裸一貫でここまでこれた兄を本当に尊敬しています。社長として担う重さは計り知れませんが一生現役でこれからも邁進していただきたいと願っています。

取材を終えて

穂積直樹（元ビジネス雑誌編集長・現フリーライター）

「まだ話し足りないな」

合計十数時間に及ぶインタビューを終え、私がノートを閉じると小林社長がこう言った。自分の経験の半分も語ってないという。

「じゃあもう少しやりますか」

「いや、これでいいでしょう」

社長は酎ハイをぐっと飲み干した。

「カジノの話はどうしましょうか？ 書きますか」

「それは入れても入れなくてもいいよ。たいした話じゃないし」

「ピアノの話は入れたいですよ」

「ピアノ？」

「あの、社長が息子さんと、娘さんにピアノを習わせるとき、自分も音楽について知っておかなければいけないからと、自らも習いに行っただって話ですよ」

「あーあれね。まったく弾けず恥ずかしい思いをしたけど。それもいいかな」

「でも流石だと思いましたよ。そこまでする人はいないし」

「まったくお世辞がうまいねー」

取材は終始こんなざっくばらんな感じで行われた。八十ページという制約の中では落としたエピソードは数知れず。書けない話も多数ある。それでもすべてに共通する言葉を私は見つけた。それは「気骨」である。

とくにそれを感じたのは帰り際に聞いた「産業廃棄物」の話である。故郷が汚されることを食い止めるためたった一人でも戦うという。一本筋の通ってる方だな、と思うとともに心の優しい人だなと感じた。

小林社長は物事をはっきり言うために誤解されることも多い。しかし同時に人に対する思いやりに満ち溢れている人でもある。恥ずかしがって決して口には出さないけれど。

今回自叙伝をお手伝いし、そんな社長の深い部分に触れさせていただいた。それはただ一緒に飲んでるだけでは決して見えて来ないものだし、非常に勉強になる部分が多い。

「今回の自叙伝はまだ旅の途中」と社長は言う。ならば今後も見つめて行きたいと思う。社長の今後のさらなる飛躍を。

私の人生の風景

<http://p.booklog.jp/book/85929>

著者 : bruford-2006

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bruford-2006/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85929>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85929>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ